令和５年度　自己評価書

学校園名　附属世田谷中学校

１　学校経営計画
別紙のとおり。

２　自己評価

領　域	重点目標・具体的取組	達成状況・成果と課題	評価	今後の改善方策	学校関係者評価を踏まえた今後の改善方策
学校運営	○学校行事等の在り方について、本校の強みを生かした活動となるように検討を重ね、活動内容の改善と充実を進める。 ○昨年度の学校行事等の実施内容及び成果をふまえ、活動内容の精選を行う。	○行事等については、昨年度の成果と課題を検討し、適切な計画案を立て実施できた。 ○新たな在り方で実施したオリエンテーションキャンプとスタディツアーについては、２年目となり、内容等が定着してきた。 ○テーマ研究では２・３年生は個人・グループ研究にかかわらず一人一人が発表する機会を設けた。	A	○今年度実施の反省を生かし、引き続き、行事等の精選、改善について検討を進めていく。 ○テーマ研究についての議論を深め、生徒の主体的学びを深める機会をより多く提供できるよう、システムづくりを進めていく。 ○学校評価と個人評価の整合性を高め、教員の学校経営への参画意識を高める。さらに全教職員の学校経営への参画を進める。	・学校評価と個人評価の整合性を高め、教員の学校経営への参画意識を高める。
	○ICT ツールを活用した業務改善について、これまでの取組を検証し、さらに必要な方策等を立案、実施していく。 ○ICT ツールを効果的に活用し、業務の円滑化を図る。	○Teams の活用が定着し、業務の円滑化が進められている。従来よりも情報共有がしやすくなった。 ○ICT 委員会を中心として、様々な観点から必要な対応について活動を行った。 ▼蓄積されていくデータの管理が課題となっている。 ▼学校事務との連携の円滑化が課題である。		○ICTの効果的活用をさらに進めていくためには、さらなる環境整備やルール等の見直しが必要である。多角的な視点から業務の円滑化に努める。 。	・ICT活用は業務円滑化、改善に欠かせないため引き続き推進する。また、学校組織強化のための学校事務との連携を進める。
	○「いじめ防止基本方針」に則り、いじめの未然防止、早期発見に努めるとともに、情報の共有化を図り、迅速かつ適切な対応ができるような仕組みを整備する。	○いじめはもちろん、生徒指導案件については、「適切な初期対応」と「組織的対応」の徹底を心掛けた。		○いじめの早期発見・対応に向け、組織体制をさらに整備していくとともに、教員の研修等を行う。 ○不登校生徒への対応をさらに組織的に進める。 ○成果と課題を生徒の立場からも考察、	・生徒一人一人の理解に努め、それに即した指導を行うとともに、外部専門家を招いて教員研修を行

	○生徒及び保護者に対して、迅速かつ的確な情報提供を実施する。	○学校HPの「ふかさわだより」に加え、校長講話もフェイスブックで発信した。 ▼HPの抜本的な見直しが必要であると考えているがいまだ着手できずにいる。 ○行事の参観については従来の形に戻すことができたが、授業参観等は気象警報等により実施できないことがあった。 ○学校からのお知らせや連絡方法については来年度より連絡システムの更新を行う予定である。		検証する。 ○ICTを効果的に活用した学校広報活動の取組を拡大し推進する。 ○授業公開等、オンラインの活用を進める。 ○連絡システムの更新を機会により一層の情報発信等の改善を行い、発信を推進する。	う。 ・保護者の参観の機会を増やす。学校の様子を知るための情報発信等を改善する。 ・施設・設備の老朽化に対応し、安全確保に万全を期し、丁寧な点検と修理を行うとともに関係機関との連絡を密にする。
教育活動	○生徒の学習の実現状況を適切に把握しつつ、その分析・検証を通じ、常に授業改善に取り組む。 ○いじめの発生を未然に防止するため、生徒一人一人の自己有用感を高め，自尊感情や他者への思いやりを育む教育活動を全校集会、授業、特別活動、生徒会活動等で推進する。 ○各教科等で育成する資質・能力を明確にしつつ、「深い学び」を実現する授業を行うとともに、学校図書館と連携した授業づくりに取り組む。 ◎生徒会・委員会をはじめ、生徒による活動の在り方を点検し、より生徒の主体的活動の良さを生かす活動となるよう、その在り方を検討する	○多くの授業で生徒による振り返りを実施し、状況把握に努めた。Formsを効果的に活用している。 ○学期ごとにSOSシートによるいじめの未然防止に取り組み、小さな変化を見逃さないように学校全体で取り組んだ。 ▼生徒会や生徒自らが取り組む活動があまりできなかった。。 ○学校図書館を活用した授業は多く展開されている。司書教諭も図書館を利用した授業づくりに関する様々なアイディアを提供し、教員とよい連携が取れている。 ○生徒会役員会からの提案等を生徒にも考えてもらう機会を持てた。	A	○進路について、必要な情報は１・２年生からも伝えるとともに３年間の進路の計画を示す。 ○Q-U調査結果をより効果的に活用し、生徒の状況を把握し、学級経営、学年経営に生かすことが定着してきた。 ○生徒一人一人の自尊感情、人権意識を高める取り組みを全教育活動で計画的に進める。 ○生徒の学びを推進する視点からも学校図書館と連携した授業づくりを続ける。	・授業におけるICTの効果的活用をさらに進めていく。 ・進路について、必要な情報は１・２年生からも伝えるとともに３年間の進路の計画を示す。 ・生徒一人一人の自尊感情、人権意識を高める取り組みを全教育活動で計画的に進める。 ・生徒から相談を受けやすい環境をつくる。
研究活動	○学校研究として、本校で育みたい力を明確にし、その資質能力を育むための手立てを開発する。 ○教科指導の研究の深化を図るとともに、カリキュラムマネジメントの視点から教科横断的な指導の充実を図る。	○学校研究のテーマを「情報活用能力を育むモデル単元の開発ー資質・能力をベースとした教科横断による実践を通してー」と設定し、本校で育てたい「情報活用能力」とはどのようなものか、それを教科特性を生かしながらいかに育んでいくか、そのモデル開発に取り組んだ。まだ不十分ではあるが教科横断の視点を含め、少しずつであるが進められている。学校研究ともつ	A	○今年度はまとめの年になるが、異なる教科同士での意見交換を今後も継続していく。来年度の研究会でモデル単元案を発表する予定である。	・今回の研究テーマは一区切りをつけるが、引き続き、教科横断、連携の視点を持ち続けて研究を進めるる

	○教育研究の成果を公開研究会（６月実施）や研究紀要（年度末）、関係学会等で公表する。特に世田谷区や近隣区と連携を推進していく。 ○授業研究会（年２回）や校内研究会（原則月１回）などの実施を通して、教科内容や活動方法等について点検と配慮をおこなう。	なげ、校内授業研究会を実施することができた。 ○公開研究会を６月に対面で実施した。２４０名の参加を得た。昨年より多くの参加者全国から来校した。次年度も対面での実施を企画しているが、オンライン実施から学んだことも生かしていく。 ○「教育と研究」年２回発行、保護者及び、近隣の中学校へ配付した。		○オンラインによる公開研究会等も一つの形態として、今後も活用の在り方を模索していく。 ○公開研の参加者増に向けて、広報活動等を改善する。特にホームページに最新の研究成果を掲載するなどを積極的に進める。	・対面も重要であるが、オンラインでより広く多くの発信公開することでハイブリッドで柔軟な方法を進める。
学生の教育・支援活動	◎教職の魅力が十分に感得されるよう適切な教育実習のマネジメントを行う。 ○個々の実習生の状況を的確に把握し、適切かつ効果的な指導を行う。	○教職の魅力に触れるような講話を実施した。 ○実習生の状況を的確に把握することに努め、過度な指導がないよう心掛けた。	A	○内容の精選やコミュニケーションの在り方等、さらに検討していく。 ○大学との連携をさらにすすめ、実施後の効果測定等も検討する。	・教員志望を増やすための方策も意識しつつ、大学との連携をさらにすすめ、実施後の効果測定等も検討する・
社会貢献活動	○大学と連携し、実践的・開発的な現職教員研修を夏季と春季の２回、今まで実施していない教科でも積極的に実施する。 ○参加者の研修成果の活用について、その状況を積極的に把握することにより研修内容の充実・改善に取組み、学校の特色化を図る。	○現職教員研修は、年々実施回数も増え、積極的に実施されている。教科によっては授業公開を行ったり、定期的に開催するなど。対面とオンラインを併用して実施している。 ○いくつかの教科では世田谷区の教科研究会との連つながりもでてきている。	A	○オンラインでの実施を含め、より多様な現職研修の在り方を模索していく。 ○引き続き、世田谷区の教科研究会とのつながりをつくっていく。	・引き続き世田谷区内の学校との連携を積極的にすすめる。